

## 「何であるか」という問い ——『メノン』冒頭部を中心に——

大草 輝政

Terumasa OHKUSA

ソクラテスは「何であるか」を問う。敬虔とは何であるか。勇気とは何であるか。このことは、しばしば定義の問いとして呼び慣わされ親しまれている。以下では、『メノン』冒頭部を中心に、その問いのひとつの局面をめぐって再考を試みる。すなわち、ソクラテスが「何であるか」の優先性を説くことは、彼の少なくともはあるが明確になされる知の表明と矛盾しないのだろうか。

### I

ソクラテスは次のような見解を示す。

というのも、あるひとつのものが何であるかを知らないとしたら、それがどのようなものかということ、どうしてぼくは知ることができるだろう。 (Men. 71b)

いくつかの類例は、比較的容易にたどることができる。徳の教育をひとつの焦点として展開する『メノン』においても、その結論部には、「しかし、こうしたことについてほんとうに明確なことは、いかにして徳が人間にそなわるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問いを手がけてこそ、はじめてわれわれは知ることができるだろう」と付言されている。

いずれの例も、ソクラテスはメノンを相手に、ことの何であるかが優先されるべきこと、いわゆる定義の優先を指摘している。ソクラテス自身は彼の「何

であるか」という問いを「定義」に相応する呼び名で言い表さず、このようなパラフレーズにはある慎重さを強られるが<sup>1)</sup>、そこで言われている中身は、おおよそ次のように解することができるだろう。すなわち、徳なら徳にまつわる諸々の問題に解答を求めようとするなら、その場合それは、徳それ自体が何であるかということに依存している、と。考察が、美、友、その他いかなるものにあつても、同様の原理は働きうる。適用範囲があらゆることへ拡大されうることは、最初にあげたテキストがそのまま示している。このような事情は、『国家』第一巻を締めくくるソクラテスの発言も、まったく違和感なく、同種の思考上に捉えるようわれわれに促すはずである。

こうして、討論の結果ぼくがいま得たものとは言えば、何も知っていないということだけだ。それもそのはず、〈正義〉それ自体がそもそも何であるかがわかっていなければ、それが徳の一種であるかないかとか、それを持っている人が幸福であるかないかとかいったことは、どうていわかりっこないだろうからね。(R.I 354c)

すなわちこの場合は、正義とはそもそも何であるかを知らなければ、正義にまつわるどのようなことに関しても確たる認定をくだすことができない。ソクラテスはそうトラシュマコスに告げているように見える。ところが彼は、『ソクラテスの弁明』（以下『弁明』）で、正不正について、一定の明確な知を表明しているのである。

不正をなすこと、神でも人でも、自分よりすぐれているものがあるのに、これに服従しないということが悪であり醜であるということは、知っているのです(οἶδα)。

(Ap. 29b6-7)

---

<sup>1)</sup>対話篇に描かれるのは、もっぱら τί ἐστίν と問うソクラテスの印象的な姿であって、「定義」という呼称は、アリストテレスの ὁρισμός 以来の伝統と言える(ただし場合によって ὁρός という言葉に、その役割の徴候を見ることは、あるいは可能かもしれない。cf. R.I 331d2)。「定義」また 'definition' という言葉の難はしばしば指摘される——ソクラテスの意図が辞書的定義や語の意味ということにあるのではない、など——が、多くの論者は、一定の断り書きとともに、なお慣例的に用いている (Beverluis[1974] p. 332 n. 5, Fine[1992] pp. 202-203, Irwin[1995] pp. 25-27, Kahn pp. 171-172, 178, Kraut p. 209 n. 38)。以下でも、「何であるか」というソクラテスの問いに対応するものとして、さしあたりは区別をもうけず、「定義」という言葉を使用する。

正義とは何であるかを探求し、その答を知らないはずのソクラテスは、正不正にまつわることについて、知を表明できないのではないか。よって、この言明は例外として扱うべきではないか。

Irwinは、定義優先の原則をソクラテスに帰す。すなわち、徳が何であるかを知り、その定義を与えることができなければ、徳をめぐるいかなる問いの解答も知ることができない。この原則とともにソクラテスの無知の立場を重視しようとするならば、『弁明』29bにおける知としての重みを軽減する対処が生じよう<sup>2)</sup>。初期対話篇に限れば、知と思わくの区別が、とりたてて理論的な説明のもとに明示されることはないものの、しかしIrwinは、実質的に知と思わくの峻別を初期対話篇全般に認めている。なぜなら、ソクラテスは頻繁にそして強調的に知を否認するゆえ、それを単なるアイロニーとして受け取ることが困難だからであり、他方で、決して暫定的としては扱うことができないようないくつかの命題<sup>3)</sup>を、ソクラテスは強く主張しているからである。知を取り去るとしても、真なる思わくを帰すことが許されるなら、ソクラテスの言動にも、一貫性を保った説明が可能である。Irwinのソクラテスは、どこまでも思わくの内にとどまる。

このことにはしかし、議論の余地があり得る。『弁明』29bでは、多くの人の抱く死の恐怖というものを、知らないのに知っていると思いきむ逸脱、非難されるべき無学無知であると論じた上で、それに照らして自らの知を表明しているなど、ソクラテスの知の主張には、あくまで思いなしの過誤に対置させられた力点が十分に置かれている。では、『国家』や『メノン』に見た定義優先の主張とどう重ね合わせればよいのか。ディレンマ解消の方策のひとつは整合性

---

<sup>2)</sup>Irwin [1977]では、『弁明』29bの知を単に例外的としてまったく力点が認められていない。Irwin [1995]では、『弁明』29bの解釈にあたって、次の選択肢が考えられている。すなわち、①ソクラテスは定義の優先を受け入れてはいない。②ソクラテスは整合的でない。③これは知の主張を述べているのではない。Irwinは③をとり、ソクラテスに知の主張はないという方向を示す (pp. 28-29)。知の表明箇所と言及する Irwinの見解の軌跡とその微妙な相違について、cf. Fine [1996] pp. 234-235 n. 6.

<sup>3)</sup>Irwinの指摘で、「いかなる徳も、常に、美しい (καλόν), 善い (ἀγαθόν), 有益である (ὠφέλιμον)」などがこれにあたる (cf. Irwin[1977] p. 39 "Socratic principles", "Agreed principles", [1995] p. 48 "Guiding principles")。しかし、異論の余地が対話相手との間に生じれば、ソクラテスはいかなることも共同討議に付すのではないかと思われる (cf. R.I 348c-349a)。

を積極的に放棄することである。すなわち、Krautも認めるように、『弁明』においては、29bで、ソクラテスは確信に満ちかつ慎重に知を主張しているけれども<sup>4)</sup>、しかしその一方で、プラトンのソクラテス描写が、対話篇によって、一定の連続性を保ちつつ変化を遂げるとしても不思議ではない。つまり対話篇として、概して最初期に配置される『弁明』と、それぞれ中期付近に配置される『国家』第一巻、『メノン』<sup>5)</sup>との間には、内容的に相違が生じている可能性を考えることができる。Krautは、定義優先の原則の有無によって、プラトンの／ソクラテス的、あるいは中期的／初期的との違いを見るいわば発展的解釈に立つ<sup>6)</sup>。

IrwinやKrautの解釈をはじめ、多くの論者たちは、定義優先原則と呼びうるものを、少なくともいずれか特定の対話篇で、一般化された原則として認めている。しかし、いまひとつの対処の可能性が残されていよう。それは、定義優先原則そのものの捉え直しである<sup>7)</sup>。原則の一般化として格好の典拠となるのは、『メノン』71bであるが、あらためて、その含意はどのようなものであるだろうか。

---

<sup>4)</sup>Krautは、『弁明』においては、29bの他にも、ソクラテスに多くはないがしかし徳や善について一定の知を帰しうることを認める (cf. Kraut pp. 273)。

<sup>5)</sup>この他、Krautは『ゴルギアス』(508e6-509a7)を指摘し、Irwinがソクラテスに帰していたものとほぼ同様の原則を認めている。Kraut pp. 275-279—— (i) If someone knows the correct definition of X, he is in the best possible position for making true claims about X. (ii) No one is entitled to claim any knowledge about X unless he is in the best possible position for making such claims. 『弁明』でのソクラテスは、(i)を持つが(ii)を持たないとされ、他方で『メノン』、『国家』第一巻、『ゴルギアス』のソクラテスは、(ii)を持つとされる (cf. Kraut [1984] p. 213 n. 45)。

<sup>6)</sup>Kraut [1984] pp. 276-277. Cf. Vlastos[1985a]p.26 n.65.

<sup>7)</sup>この方向をすでに示すのはNehamas[1986]である。すなわち、なんらかの形で定義の優先が求められる『エウテュプロン』6e3-6, 『ヒippias大』286c5-d2, 304d5-e3, 『ラケス』190b8-c2, 『リュシス』212a4-6, 223b4-8, 『プロタゴラス』361c2-6, 『国家』354b-c, 『メノン』71b1-8, 100b4-6といった箇所を検討よれば、それらはすべて、コンテクスト上、単に自然に要求されるものばかりである。それぞれのコンテクストを離れて定義知優先を原則化する必要はなく、よって、定義を知らなければ、それがどのようなものであるか何も知ることができないというのは、いわば仮構の一般原則ということになるだろう (cf. Brickhouse & Smith[1989]p.102)。

II

『メノン』当該箇所では、何であるかの知の優先が、きわめて簡潔な形で提示されている。Fineは、そこで言及されているく何であるかの知の優先（Priority of Knowledge What=PKW）の解釈をめぐって、似通った以下の3パターンを検討する形で、その射程を明確化しようとする<sup>8)</sup>。

- (A) もし、ひとがXが何なのかまったく考えを持たない——Xについていかなる信念も持たない——なら、ひとは、Xについてなにも言うことが（言おうとすることが）できない。
- (B) もし、ひとがXの定義をまったく知らないなら、ひとは、Xについてなにも言うことが（言おうとすることが）できない。
- (C) もし、ひとがXの定義をまったく知らないなら、ひとは、Xについてなにも知ることができない。

ソクラテスに帰されることの多いこれらの見解は、しばしば混同されがちであるけれども、三者三様、異なっており、Fine自身は（C）のみをソクラテスの主張として析出する。（A）は、それ自体としてはもっともに見えるものの、Xに徳を代入してみた場合、徳についてメノンを自信ある仕方で吟味していくソクラテスにうまくあてはまらず、（B）もその後件は、ソクラテスにそぐわない。大雑把に言うことが許されるなら、（A）や（B）は、徳が何であるかの知を否認しながらも、徳についてさまざまに思いなし語りうるソクラテス自身によって拒否されると言えるだろう。

（C）に収斂したFineのPKWは、『メノン』のテキストとほぼ何も変わらないように見えて、しかし（A）（B）（C）の比較検討を経ることによってある力点が浮かび上がっている。つまりFineの分析も、結果としてIrwinと同様のことを示して、知と思わくの峻別を強く要請している。そしてその解釈は、とりわ

---

<sup>8)</sup>Fine[1992].

け『メノン』においては、有力な解釈と言えるだろう。というのもそれは、『メノン』80dにあらわれる提議——「いったいあなたは、それが何であるかがあなたにぜんぜんわかっていないとしたら、どうやってそれを探求するおつもりですか？」——にそくして、それに明快な解決を与えているからである。すなわち、ソクラテスは、徳が「何であるか」探求過程にあるゆえ、徳について、あるいは徳がどのようなものであるかについて、なにも知らない。ただし、そのことはソクラテスが徳について思いなしたり議論したりすることをなんら排除しない。つまりソクラテスは、探求するものをめぐる知をまったく持たないが、思わくのうちに、探求可能な位置を見いだすことができるのである。

しかし、ここで問題としたいのは、ときに確認することができるソクラテスの知の提示の局面である。知と思わくの別が、対話篇のモチーフのひとつになっているように見える『メノン』においてさえ、ソクラテスは知を提示しうる位置にいると言えるのではないか。

けれども、正しい思わくと知識とは別のものだということ自体は、決して単なる推量ではないつもりだ。いや、もしもこのぼくに、自分が知っていると主張できるようなことが何かあるとしたら——そんなものはわずかしかないだろうが——、とにかくこのこともまた、ぼくは知っていることのひとつに数えるだろう。

(Men. 98b1-5)

なるほど、テキストは慎重な表現が選ばれている、がしかし、「あるとしてもわずかであろう知」を、あえて提示している局面と取ることは十分可能であるだろう。少なくとも、ソクラテスが、知を持ちうるということ自体は、上記テキストによってなんら損なわれていない<sup>9)</sup>。さらに、間接的にはあるが、以下は、ソクラテスが一定の知を保持していることを示唆している。ソクラテス

<sup>9)</sup>Fineにおいては、上記はソクラテスの知の主張ではない。当該テキストにおけるソクラテスの「知の主張」部分への言及を仮定法で表して、それがソクラテスに実際に知を負わせるものでないことを示しつつ、かつ、このテキストが知と真なる思わくの区別を確信をもって提示している点を咀嚼することによって、このテキストは、知と思わくの峻別を、ソクラテスのエレンコス（吟味・論駁）という営みにとって重要であるとみなすFineの立場を、支持するものであるとされている（cf. Fine[1992] pp. 215, 226 n. 43.）なお、Fineは、想起説とエレンコスが二者択一的な関係にあるのではなく、エレンコスの力を説明するものとして想起説を捉えているが、この限りでは、私は異論を持たない。

は、メノンに言う。

そして問答法においては、ただたんに真なる答をするだけではなく、質問者が知っていると前もって認めるような事柄を使って答えるのが、おそらく約束によりかなったやり方というべきだろう。(Men. 75d<sup>10</sup>)

また、幾何学の誤答をしていた子どもが、エレンコスを受けて正答に至る局面では、ソクラテスは、想起の可能性、つまりそれはその子自身が自分で自分のなかに知識を再把握していることを示すものであると説明しながら、次のように述べる。

その場合、この子がいまもっている知識というのは、以前にいつか得たものであるか、もしくは常にもちつづけていたものであるか、このどちらかなのではないだろうか？(Men. 85d)

もしこれを字義通り、いま子どもが知識を持っていると受け取ることができるなら、エレンコスにおける探求途上において、いっさいの現在の知を排除する対処もまた困難であると言わなければならない<sup>11)</sup>。Fineが見ていたように、そもそも71bの含意として、ソクラテスが知と思わくの間相違について明晰な態度をとっており、そこから生じる制約——この世での徳の探求過程においては、知は放棄され、あくまで思わくのみが帰されうる——をソクラテス自らに課していることが、その時点ですでに示されていたということになるなら、これら現行の知の局面を示唆する言明は、それぞれなんらかの仕方で値引きされざるを得ない。

---

<sup>10)</sup>75d6-7は、προομολογῆ, ἐρωτῶν を読む。

<sup>11)</sup>Fineは、エレンコスにおける探求過程、想起の過程での、この世における現在の知の成立をことごとく排除しようとする (cf. Fine[1992]pp.223-224 n.40)。しかし「いま」の知に言及している『メノン』85d9は、Fineの読みにも異を唱えうる。

## III

『メノン』という対話篇は、徳に関するメノンからソクラテスに向けられた唐突な問いにはじまり、登場人物の設定およびすれ違うやりとりによってしばらくアイロニカルな響きを共鳴させたままであるが、その装いのもとで内容的に急速に深度を増していく印象を受ける。それは次のようである。徳は教えられるか、それとも訓練によって身につくのか、それとも訓練や学習ではなく生まれつきの素質によるのか、それともほかの仕方によるのか。しかし、メノンによるこの問いかけをソクラテスは受けつけず、より包括的な視点を投げかける。「おや客人、どうやら君には、ぼくが何か特別恵まれた人間に見えるらしいね。徳が教えられうるものか、それともどんな仕方で備わるものなのか、そんなことを知っていると思ってくれるとは！ だがぼくは、教えられるか教えられないかを知っているどころか、徳それ自体がそもそも何であるかということさえ、まったく知らないのだよ」。アテナイ人ならメノンの問いに対して、誰しもこう答えるだろう、とソクラテスは述べた上で、ソクラテス自身をその立場に重ねる——。何であるかの知の優先、あるいは、いわゆる定義の優先は、これに続けて述べられる。

(a) あるひとつのものが何であるかを知らないとしたら、それがどのような性質のものかということを知ることができよう。(b) それとも君には、メノンとは何ものであるかをぜんぜん知らない人が、メノンが美しいか、金持であるか、高貴な人物であるか、あるいはまたそういった性質と反対の人間であるか、というようなことを知ることができると思えるかね。どうだね、できると思うかね？  
(Men. 71b1-8)

さしあたり、ソクラテスの一続きの言葉の最後の部分を (a) (b) に分けるとして、メノンは上記のソクラテスの問いかけに、「それはたしかにできないでしょう」と即答している。しかしその即答は必ずしもわれわれにとって明晰ではない。

(b) を Bluck は、いわゆる「見知り」(acquaintance)の問題として解釈する。'knowledge by acquaintance' と 'knowledge by description' を区別するこの視点からすれば、この場合、メノンを見知っていなければ、彼がどのような性状にあるか

知ることができないことになる<sup>12)</sup>。しかし、その図式を、ここにうまく持ち込むことができるだろうか。むしろ、メノンに実際に会ったことがなくても、彼が裕福であるかどうかを知りうるし、またメノンに実際に会ったとしても彼が裕福であるかどうかを知らないことがあり得る、とわれわれは考えうるのではないか<sup>13)</sup>。とすれば、メノンと出会うことによる面識は、上記に描かれた性状を知るための必要条件でも十分条件でもないことになり、つまり定義優先の必要を説く内容には、適っていないことになってしまいかねない<sup>14)</sup>。

(b) は (a) の例示であるため、(a) との関連も考えながら、それが何を意味しているのか、その候補を考え直してみたい。(a) はいかなる主張であるか。もし (a) が、Fineに見たPKWのようなものであり、すなわち知と思わくの峻別を示唆する無制約的一般原則を提示する発言であるとするならば、それはすでに見たように第一にソクラテスの知の表明と矛盾する。Krautに見た発展的解釈のような可能性も同様である。『メノン』においてさえ、ソクラテスは知を全面的に排除した立場にない可能性が先に確認された。さらに (a) は見知りモデルであるとの可能性も、(b) の例示が、直ちにそのことを示さないゆえ、そのような面識の有無を問うような文脈であるようにもすぐには見えない。

では、メノンはどうしてソクラテスによる (b) に即答しているのか。ソクラテスとメノンの想念には多少の相違があるとも考えられるが、おそらくソクラテスが同意を促しメノン側もそれに率直に応答したことによって成立した、二人の間での共有事項は、知と思わくの峻別や哲学的含意というよりは、さしあたりかなり素朴な内容であるように思われる。

メノンが、美しいか、金持であるか、高貴な人物であるか、という問いは、いかなる問いであるか。われわれは対話篇内部から、メノンが有力貴族の家柄にあり (78d)、一定の教養を授かった人物であり (80b2-3)、善きものといえは健康や富のほか、金銀や名誉、官職を得ることを彼が数えている (78c) ことなどを確認することができる。また彼はゴルギアスの影響を受け、堂々と発言を

<sup>12)</sup>Bluck pp. 213-214

<sup>13)</sup>メノンが美しいということを、目かくしをしていながら、聞き知る可能性について、cf. *Men.* 76b4-5.

<sup>14)</sup>Nehamas pp. 280-281. その他 cf. Kahn pp. 159-160, Klein p. 42, Sharples pp. 124-125.

することに慣れている。おそらくメノンにとって心地よく響く先の三つの性状は、彼にとって、Nehamasが指摘するように出生、家柄、家系、経歴などに関わる問いであると言えるのではないか<sup>15)</sup>。つまりかなり通俗的な意味で、美しさ、富裕さ、高貴さが何によってかと尋ねられた場合、その答を提出できるために知っていなければならないことが「メノンとは何ものであるか」ということであると考えられる。例えば、「アレウアス家と関わりのある人」あるいは「ペルシア大王に縁のある人物」「有力な貴族の出」ということを念頭においた答え方をかりにしたとすれば、何か先の三つの性状に合点のいく、あたかもひとつの説明が成立したかのような気になるのではないか。

しかし、もしこのような通俗的な了解が、メノンの即答を促していたのだとしても、ソクラテスは単に *ad hominem* な対話活動をしているわけではない。続く蜜蜂の例によって、ソクラテスの問いがどのような関心に方向づけられているかより詳しく見ることができる。ソクラテスは、徳とは何であるかという問いについて、さらに次のように例示を続ける。

…かりにもしぼくが蜜蜂というものの本質について (*περὶ οὐσίας*)、それはいったい何であるか (*ὅτι ποτ' ἐστίν*) とたずね、それに対して君が、蜜蜂にはいろいろとたくさんの種類のものがあると答えたでしょう。… (Men. 72b1-2)

それなら、ぼくが君に言ってほしいのは、その肝心のものなのだよ、メノン。つまり、それらの蜜蜂が、その点では少しも異ならず全部同じであるところのもの (*ὅ οὐδὲν διαφέρουσιν ἀλλὰ ταῦτόν εἰσιν ἅπασαι*)、それを君は何であると主張するかね? (Men. 72c1-3)

そしてソクラテスは話題を徳に戻す。

たとえその数が多く、いろいろの種類のものがあるとしても、それらの徳はすべて、あるひとつの同じ相 (*ἐν γέ τι εἶδος*) を持っているはずであって、それがあるからこそ、いずれも徳であるということになるのだ (*δι' ὃ εἰσὶν ἀρεταί*)。この相を見据えることによって、「まさに徳であるところのもの (*ὃ τυγχάνει οὐσα ἀρετή*)」を質問者に対して明らかにするのが、答え手としての正しいやり方というべきだろう。 (Men. 72c6-d1)

<sup>15)</sup>Cf. Nehamas [1986] pp. 284 sqq.

メノンとは何ものであるか、という問いも、同じ脈絡で捉えようとするなら、それは、ある種のメノンの本質、それによってこそメノンが美しく、金持ちで、高貴であると答えることができるような、説明を可能にするところのものを問うているということができるだろう。つまり、「徳は教えられるか」や「メノンが美しいか」という質問があったとき、少なくとも、正当に答える立場にある者が把握していなければならないところのもの、それが、「徳とは何であるか」であり、「メノンとは何ものであるか」であると言える。逆に、答え手は、それに触れなければ、質問者を、十分にまた正当に説得することはできない。この意味で、何であるかに答えることは根拠を提出することである。

さしあたり、確認されたのは、(a) や (b) に見られる構造は、教えるあるいは答える立場に要求される包括的な知らないし理解の必要を指摘しているという点である。質問に答え説明するためには、なぜそうなるのか、に迫る知らないし理解が求められる。ことの何であるかが問われる局面は、おしなべて質問者と答え手が意見を交わし、答え手を担う者がより包括的な理解と知を要請されているという状況にある。すなわち、異論の余地が生じている状況において、なお知者となるためには、包括的知が必要であり、そのことがなければ、「答え手としての正しいやり方」によって、対話相手に適切な説明を与えることができない。「徳が教えられるか」や「メノンが美しいか」に説明の力を与える「徳とは何か」「メノンとは何ものか」といった知が優先されるのは、そのような局面においてである。

もしも、何であるかの優先ということが、こうした一定の局面の制約のもとに成立すると考えることができるなら、『メノン』『国家』『弁明』に見た齟齬の可能性、あるいは『メノン』内部にも認められるであろうその可能性は、不整合なく捉え直すことができるのではないか。なぜなら、何であるかという問いがどういうときに発動されるかに注意するなら、その問いはけっして、例えば外国の人が今までになじみのない単語やフレーズに出会ったときに、はじめてのその言葉を聞きなおして「それは何か？」と問うような作業には決して限定され得ない、重層的な知の構造を可能にしていると見えるからである<sup>16)</sup>。すなわち、例えば、「知と思わくは異なる」と述べたり、そのことを知っている」と述べたり、その他どのようなことであれ、「・・・を知っている」

<sup>16)</sup>Burnyeat[1976]では、「理解」 understanding というニュアンスに傾く知のあり方が模索される。

「・・・を知らない」という用語を含む言葉遣いを普段使用してはなお、あるいは普段のその使用があるからこそ、必要に応じ、局面に応じて、より本質的に「では、知とは何であるか」という問いを投げかけうると言える。また同様に、正不正について普段論じ、あるいはときに断片的知を表明しうる位置にいながらなお、少なくともそれとは別に、局面を改めて、「正義とは何であるか」と、根本的な問いをソクラテスは投げかけうるだろう。正不正をめぐるひとたび異論の余地が生じ、なぜそう言えるのかということをも求める必要が生まれれば、より包括的な視点が要請され、それまで前提にされていた基盤を確認し直す必要がある。このような意味で、何であるかを問うことは、日常の言葉の洗いなおしを含むはずであるけれども、だからといってそれは、日常の言葉の力を全面的に拒否し、それがわかるまで、例えば「知」や「正義」が何であるのかについて最終的な理解に到達するまで、「知」や「正義」といったもろもろの日常の言葉の使用を禁止するというほど自滅的に強い要請ではない。もしこのように、どれほどのことが問題になっているか、その問われる内容に依存するような重層的な認識のあり方がさしあたり素朴に考られるとするならば、そこからの帰結は次の指摘を可能にすると思われる。すなわち、ことの何であるかを知らなければ、それがどのようなものであるか、なにも知ることはできない、とあらゆる文脈を越えて一般化することはできない。

(京都大学・西洋古代哲学史・博士課程)

## 文献

- Beverluis, J. [1974]. "Socratic Definition", *American Philosophical Quarterly* 11, 331-336.
- [1987]. "Does Socrates Commit the Socratic Fallacy? ", *American Philosophical Quarterly* 24, 211-223.
- Bluck, R. S. [1961]. *Plato's Meno*.
- Brickhouse, T. C. & Smith, N. D. [1989]. *Socrates on Trial*. Princeton.
- . [1994]. *Plato's Socrates*. Oxford.
- Burnyeat, M. F. [1976]. "Examples in epistemology: Socrates Theaetetus and G. E. Moore", *Philosophy* 52, 381-398.
- Day, J. trans and ed.[1994]. *Plato's Meno in Focus*. London.
- Fine, G. [1992]. "Inquiry in the *Meno*" in Kraut, R. ed.[1992]. 200-226.
- Geach, P. T. [1966]. "Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary", *Monist* 50, 369-382.

- Guthrie, W. K. C. [1956] *Plato: Protagoras and Meno*. London.
- Irwin, T. [1977] *Plato's Moral Theory*. Oxford.
- . [1995]. *Plato's Ethics*. Oxford.
- Kahn, Ch. [1996]. *Plato and the Socratic Dialogue*. Cambridge.
- Klein, J. [1989]. *A Commentary on Plato's Meno*. Chicago and London.
- Kraut, R. [1984]. *Socrates and the State*. Princeton.
- . ed. [1992]. *The Cambridge Companion to Plato*. Cambridge.
- Nehamas, A. [1985]. "Meno's Paradox and Socrates as a Teacher", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 3, 1--30.
- . [1986]. "Socratic Intellectualism", *Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 2, 275-316.
- . [1998]. *The Art of Living*. Berkeley and Los Angeles, California.
- Robinson, R. [1953]. *Plato's Earlier Dialectic*. Oxford.
- Santas, G. X. [1972]. "The Socratic Fallacy", *Journal of History of Philosophy* 10, 127-141.
- . [1979]. *Socrates*. London.
- Scott, D. [1995]. *Recollection and Experience*.
- Sharples, R. W. [1985]. *Plato: Meno*. Warminster.
- Vlastos, G. [1985]. "Socrates' Disavowal of Knowledge", *Philosophical Quarterly* 35, 1-31.
- . [1990]. "Is the 'Socratic Fallacy' Socratic?" *Ancient Philosophy* 10. 1-16.
- Woodruff, P. [1982]. *Plato Hippias Major*. Indianapolis, Cambridge.